北海道中央ユーラシア研究会 第 86 回例会
2010 年 7 月 3 日（土） 15：00-18:10
（北海道大学スラブ研究センター4 階小会議室 401）

須田将

「ボリシェヴィズムを習得し、敵を識別することを学べ：
ウズベク作家同盟の文書からみたソヴィエト民族文化の「開花」と大テロル」

（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程 ・日本学術振興会特別研究員）

討論者：福田宏（北海道大学スラブ研究センター・プロジェクト研究員）
司会者：宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター教授）
出席者数：15 名

＜報告要旨＞

本報告は、戦前スターリン期におけるウズベキスタンのソヴィエト作家同盟（以下、「同盟」と略記）の文書フォンド（ウズベキスタン中央国家文書館所蔵[ЦГА РУз ф.2356]。会議・大会の速記録や組織委員会議事録などのファイルを含む）を主な史料として、1930 年代半ばから 41 年までのソヴィエト民族文化の創造と大テロルという同時代的な現象を扱ったものである。従来、スターリン期中央アジアの民族知識人を扱った先行研究では、専らソヴィエト権力の抑圧的な側面が照射され、ジャディード主義（イスラーム改革派）の流れを汲む作家の弾圧が描かれてきたが、大テロルに至るまでの彼らに対する評価や彼らの置かれた立場の差異はあまり検討されず、彼らの受難が一括りに描かれるきらいがあった。他方、ソヴィエト文化の創造を扱った先行研究では、ソヴィエト権力の産出的な側面が注目され、社会主義的なソヴィエト民族文化の奨励と「諸民族の友好」の宣伝が国家の統合という枠組みにおいて果たした役割について全連邦的な視点から論じられてきたが、当時の基本的に抑圧的な環境が民族作家と作品に与えた影響については、顧みられることが少なかった。以上を踏まえて、本報告では、ウズベク共和国の「同盟」組織の事例から、ソヴィエト権力の抑圧的であると同時に産出的でもあった特徴を浮き彫りにし、この時代におけるソヴィエト民族文化の創造とテロルを単に並行した現象としてではなく、相互に関連しあう過程として示すことを目的とした。

まず、序論として議論の前提となる 1930 年代のソ連領中央アジア社会と文化の特徴を紹

介した後、以下の論点を述べた。第一に、「同盟」の設立は、統括的な全国組織による管理を通じて従来のプロレタリアート作家協会にみられた急進性を抑制するという「モスクワの論理」によるものであったが、ウズベク共和国の事例からは民族政策上の配慮が伺えること。これは、ロシア人主体のプロレタリアート作家に替えて、ウズベク人作家組織「赤鉛筆」出身の新進作家を活動の中心に据える狙いがあった。1932-34 年の「同盟」設立期に、ウズベキスタンではロシア人作家に対して「大国ショーヴィニズム」批判が展開されるとともに、ウズベク人作家に対しては先進ロシア文学の学習とボリシェヴィズムに則った「批判と自己批判」が奨励された。もっとも、ウズベク語文学作品の出版状況は悪化しており、1930 年代半ばにかけて書籍の出版件数はほぼ半減した。このことは、出版に用いられる国費の「文学基金」の配分や著作収入をめぐる作家同士の妬みあいの誘因となっていたようである。1937 年のウズベキスタン「同盟」大会では、新進作家ガフール・グロムとの作品収入を巡る個人的な諍いがアブドゥッラ・カーディリー（ウズベク語歴史小説の始祖）の告発の発端になったと報告された。

第二に、ソヴィエト民族文化への大テロル期の政治思想の作用である。テロルが本格化した 1937 年はモスクワで「ウズベク文化の十日間（デカーダ）」が催され、ウズベク・ソヴィエト民族文化の「開花」が宣伝された年でもあった。1930 年代を通じて概して小説創作は振るわず、表象性と可視性に富んだ舞台芸術が奨励される傾向にあり、ナヴァーイー原作の『ファルハドとシリン』のように、民族的な題材に社会主義リアリズム的解釈が加えられ、ロシア人芸術家の「友好的な支援」を得て演出がなされたうえで、モスクワで評価されたが、そうした作品においては「内外の敵」との闘争が表象されていたことが特筆される。1937 年のウズベキスタンの劇作品コンクールでも、タタール人女性作家アッパコヴァの少年向け劇作品『敵』が最優秀作品を受賞したが、その筋書きとは、ドイツ語授業を妨害するなどの小学生の主人公の不良化が、実は文学教師サドリッディン・ドムラザーデ（タジク人文学者アイニーが明らかなモデル）に唆されたものであり、学校集会においてドムラザーデの老獪な民族主義者としての顔が暴露されるというもので、「我々の間に潜む敵」に対する警戒という主題が時宜に適っていると評価されたのである。ウズベク人作家の作品がロシア語で紹介されることによってその「民族主義」への批判がかえって強まったり、新進作家が創作や批評において排除の要請に応えることで活躍の機会を獲得していったりした。このように、ソヴィエト民族文化の奨励と大テロルは、単に同時代のパラレルな関係にあったわけではなく、折り重なりあうものであった。

第三に、「旧世代」の作家たちは先行研究では犠牲者として一括して語られがちであったが、大テロルに至るまでの間の彼らに対する評価は一様ではなく、新進ウズベク人作家・批評家の間でも彼らとの個人的な交流の濃淡や作品評価の温度差がみられた点である。同じチャガタイ談話会に属した代表的な作家であっても、詩人・劇作家チョルパンは同盟加入さえ認められず、若手作家アイベクによる芸術的観点からの擁護の試みも功を奏しなかったのとは対照的に、カーディリーは批判されながらも、1937 年に同盟から除名されるま

で幹部会員という地位を得て活動した。ウズベク共産党宣伝文化部長で同盟幹部会員のベレギンは、アイベクらの追及役であったが、その彼も「チョルパンとカーディリーの間には天と地の差がある」としてカーディリーには同情的であったことを批判され、新進作家ヤシンらによる除名処分の後、逮捕・処刑された。チョルパンにせよカーディリーにせよ、1930 年代に出版された作品内容からソヴィエト政権への抵抗を見出すことは困難である。実際に作家追及の決め手となったのは、当時の作品内容よりもむしろ、過去のフィトラトら「民族主義者」との個人的な交流であり、とくに作家のネットワークを育んできた作品朗読を伴う饗宴（ギャプ）での私的な発言であった。反タタール人発言と民族主義を告発されたエルベクは、「旧世代」はみな過去に民族主義的な教育を受けたことが問題であったが、その後は修正されてきたと抗弁した。これに対して、「旧世代」との接触が多かった「新世代」作家たちは、例えばガフール・グロムは自身の飲酒癖に付け込まれたことを主張し、親族女性の公共活動参加をアピールしたほか、アリムジョンは『プラウダ』論説の尻馬に乗ってカーディリーらを日本の手先と非難したりして追及を逃れようとした。このアリムジョンは、1937 年に一旦除名されながら、コムソモール集会での支持を得て自身の排除は「人民の敵」による隠蔽工作によるものであったと主張し、旧執行部を追及する側にまわった人物であり、1939 年にはウズベキスタンの「同盟」議長に選出されているように、当時の「流砂社会」の縮図がみられた。

これまでウズベク人社会と文化の問題を、街区社会における大衆の生活に注目して扱ってきた報告者にとって、本報告は初めて文化エリートを扱ったものであり、明確な結論を導き出すことは困難であったが、①新しいソヴィエト民族文化の創造とテロルは共和国の創作現場で相互に関連し合っていたこと、②国外の敵と、国内の潜在的な「第五列」を意識するなかで、連邦内の統合に向けて社会の平準化（フォーマット化）が進められたこの時代にあって、「同盟」の共和国組織での活動もその過程において位置づけられること、③こうしたなかで、「形式において民族的」な文化の推奨がなされながらも、事実上、ロシア語やロシア文化の先進性が強調されていったことを主張した。

［記：須田将］

〈参加記〉

報告に引き続き、中央ヨーロッパ近現代史を専門とする福田宏氏からコメントを頂いた。福田氏からはまず、博士論文執筆中の報告者に対して、史料を扱う上でのアドヴァイスが

なされた。報告者の対象とする地域・時代は膨大な一次史料が遺されており、ともすれば史料の樹海に迷い込みやすい。そこで、アラン・コルバンの『記録を残さなかった男の歴史』を例に、史料を通して見えてくる像を如何にして描くか、言い換えれば史料をいかに利用して歴史を描くかについて、簡潔ではあるが示唆に富む助言がなされた。

次いで「４つの疑問」という形で報告内容に関してコメントがなされた。すなわち①報告の目的である「スターリン期の社会史を描く試み」とは何か。②対象をウズベキスタンに設定したのはなぜか。③作家同盟を扱う理由は何か。④利用する史料をなぜ作家同盟フォンドとしたのか、の 4 点である。そして、ある種の「公定市民社会」のアソシエーションとしてソヴィエト作家同盟を捉えることはできないかという仮説のもとに、前述の「４つの疑問」に対応する形で議論を組み立ててはどうかという提案がなされた。

まず疑問①に対応する形で、ナチズムを生んだドイツが市民社会形成において「特有の道」を歩んだという説に批判的なユルゲン・コッカらの比較研究（『国際比較・近代ドイツの市民』）を紹介しながら、広い意味で近代化を経験したウズベキスタンについても、このような比較の視座に立って市民層の研究を行ってもよいのではないか、という問題提起がなされた。

次いで、疑問②に対応して、社会主義と民族の問題をどう論じるかという問題に関しては、ソ連において諸民族の存在を前提として各共和国で「アファーマティヴ･アクション」的な政策を実施することで社会が構築されていったことに関連付けて、ウズベキスタンにおける「公定市民社会」の形成を論じる必要があることが強調された。

疑問③は、「科学アカデミーでもなく、作曲家同盟でもなく、作家同盟に焦点を当てる」ことの意義を問うものであった。そもそも作家とはどのような存在なのか、アソシエーションとしての作家同盟はどういうものだったのかについて、さらに触れる必要が指摘された。

疑問④は、大テロルにおいて作家同盟の速記録が映しだすものは何か、についてである。「大テロル」と、作家同盟に代表されるようなソヴィエト型の「公定のアソシエーション」と、「民族文化の『開花』」が共存した、とすればそれはどこかに無理があったのではないかという指摘がなされた。

これらのコメントに対して報告者からは大略、次のような返答がなされた。まず、スターリン期の社会史を描くことは、権力がいかに社会において発達していったかを示す目的をもっており、対象をウズベキスタンに設定したのは後進地域であるこの地域を見ることで、中央―地方の従属関係とその地域での営為の解明が期待できるためである。作家とは、民族エリートであるとともに、モスクワに管理される作家同盟組織に所属する人々でもあった。史料に関しては、作家同盟の他に芸術問題委員会や検閲総局の文書史料も併せて検討して総合的に判断していきたい。また、ソヴィエト市民をめぐる問題との関連で作家同盟を扱うことは今後の課題としたい、とのことであった。

続いてフロアからコメントや質問があった。ソ連史の専門家のみならず帝政期の非ロシア人社会に関心を持つ参加者や、経済学の専門家、さらには文学の専門家など、発言者の顔ぶれは多岐に亘った。ソ連史研究者からは、モスクワに焦点を当てた研究が多いなかで、ウズベキスタンのような地方に目を向けていることが研究蓄積の観点から評価された。ただし、史料の扱いについては、たとえ速記録といえども公式の場であるから、作家個人の本音とは別の公人としての作家の見解が現れているのではないか、と注意が喚起された。また、文学研究者からは、本報告で取り上げられなかったドストエフスキイやトルストイはいかに評価されたか、作家同盟にあって作家ではない人々をどう扱うか、創作圧力が文化を促進したといえるのか等といった示唆に富んだ質問がなされた。さらに、東欧研究者からは、東欧では作家同盟にジャーナリストの参加はなく、別の組織に属していたという情報が提供された。やりとりからは、文化を担当する組織の内実に、旧社会主義陣営でも差異があるという興味深い点が明らかになった。最後に、コメンテーターの福田氏から「市民」という用語の持つ多義性への注意が喚起されるとともに、報告者の史料に対する誠実な態度が評価された。

筆者は帝政期の非ロシア人地域の研究を行なっているが、民族知識人という共通の関心を持つ本報告は非常に知的刺激を受けるものであった。また、市民社会論ひとつをとっても比較の視点を持つと、歴史学や地域・時代の殻に閉じこもらず、専門の異なる研究者との議論がかくも活性化するものかと実感した会でもあった。報告者の須田氏は現在、博士論文を執筆中であるが、その完成はもとより本例会のような他分野を巻き込んでいく研究の発展・深化が期待される。

［記：中嶌哲平（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）］